

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：33938

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720416

研究課題名(和文) 北海道の鍛冶屋の変化と生存

研究課題名(英文) The Change and Survival of blacksmiths in Hokkaido Japan

## 研究代表者

齋藤 貴之 (Saito, Takayuki)

星城大学・リハビリテーション学部・講師

研究者番号：20455611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、存亡の危機にある北海道の鍛冶屋の現状把握に努め、北海道内の128市町村の計69軒の鍛冶屋および鍛冶屋経験者、鍛冶屋関係者等から情報を収集することができた。

この結果、北海道の鍛冶屋は、「インターフェイス」として多様な鉄製品とこの地に暮らす人びとをつなぎ、彼らの身体や能力を拡張させることで北海道という厳しい環境への適応を支えるとともに、その開拓、および農林水産業の発達において重要な役割を担ってきたことが明らかになった。そして、彼らは、人ともをつなぐ「インターフェイス」としての役割を担い続けることを重視し、地域の需要の変化に応じて姿を変化することによって生き残ってきたことがわかった。

研究成果の概要(英文)：In this study, I attempts to outline the current situation of blacksmiths which are faced with the threat of the destruction, in Hokkaido, Japan. And I could obtain a lot of information from them from the 24 blacksmiths - former or present - and from concerned persons confirmed in 128 cities, towns or villages in the prefecture.

As a result, this study made it clear that blacksmiths in Hokkaido had supported the pioneers to get oriented to the sever environment, and also had played an important role in the cultivation and the development of agriculture, forestry, and fishing in Hokkaido, by extending the body and power of them as "interface" between a variety of iron products and people.

And then, this study also founded that they had placed emphasis on their role as a "interface" between products and people, and that they had changed shape based on the changes of local demands, which allowed them to survive.

研究分野：民俗学・文化人類学

キーワード：鍛冶屋 北海道 変化 生存 伝統社会

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の対象は、近代化に伴う変化、すなわち、科学技術の進歩による新素材の普及、技術の機械化、生産システムや産業構造の変化、生活様式の洋風化などによる製品需要の減少、自然環境の変化による原材料の減少や消滅、修業形態の維持困難などにより、そのあり方は否応なしに変化している。しかし、本研究は、その技術や伝統よりも、むしろ、変化から生き残るための手段、すなわち、生きていく技術に着目し、生存戦略や共生といった視点から、民俗の変化や生成、あるいは消滅に真正面から取り組むものである。また、本研究には、過去や現在を検討するのみならず、対象の将来を見据えた今後の提言を試みるという特色がある。こうした提言は、一部の特殊な条件下で生じたわずかな優良事例のみが詳細に検討される場合が多く、また、被調査者にとっては、外部的で、権威的で、指導的なものになりがちであった。本研究は、優良事例ばかりではなく、特定の地域のあらゆる鍛冶屋の事例を詳細に検討し、これまでに鍛冶屋が変化から生き残るために試みてきたさまざまな手段についての分析や、今後生き残っていくために必要な要素および今後の生存戦略について検討し、また、聞き取りや直接観察という手法を駆使して、被調査者と共に理解を深め合う調査を行うことによってその克服を図る。

北海道の鍛冶屋については、北海道教育委員会による北海道の職人を対象とした全道的な調査(『北海道の諸職』(北海道教育委員会 1993);『北海道の民具と職人』(北の生活文庫企画編集会議 1996))や、北海道開拓記念館などによる調査(『北海道開拓記念館調査報告』(山本 1991, 1992, 1993))などにより、その特色の一端が示されているものの、調査対象や調査地域に大きな偏りが見られ、『秋田県の野鍛冶調査報告書』(秋田県教育委員会

1980)のような総合的な調査研究がなされていないため、本研究が多くの優れた成果を生み出す可能性は十分にあり、その成果は、当該分野における今後の研究の推進に大きな意義をもつものとなることが期待できる。

2008年度より、道央地域を中心に北海道の鍛冶屋に関する調査研究を進めており、2009年4月から2010年2月にかけては、平成21年度笹川科学研究助成の支援を受け、旧留萌・宗谷支庁管内のすべての市町村を対象とした調査研究を実施し、そこで確認された鍛冶屋の現在に至る経緯と現状から、地域産業と鍛冶屋の間には、互いにその暮らしを支え合う相互依存関係が築かれており、鍛冶屋の多くは、その伝統や形よりも、鍛冶屋という役割を優先し、自らの姿は変えようとも地域産業との関係維持を図っていることを明らかにした。

こうした傾向は、道央地域の多くの鍛冶屋にも見られることから、北海道の鍛冶屋の特性といえるものであり、これにより北海道の鍛冶屋の急激な減少が生じた可能性が高い。このことを裏付けるためには、全道的な調査研究による資料・情報の収集が急務であり、短期間に集中的な調査研究を実施しなければならない。

## 2. 研究の目的

本研究は、衰亡の危機にある北海道の鍛冶屋の現状把握に努め、調査研究を行い、北海道の鍛冶屋の歴史的、技術的特性を解明し、それに基づく生存戦略を考察、提示することを目的とする。

北海道全域を調査対象とし、徹底的な予備調査から、現在も鍛冶屋を営む人びと、及びその経験を有する人びとに関する情報を収集し、同時に、各市町村の博物館、郷土資料館等で保管されている鍛冶屋関係資料に関する情報の収集も行う。これによって得られ

た情報をもとに、現地調査を実施し、本研究のベースとなる基礎情報を可能な限り収集し、北海道の鍛冶屋に生じた変化と生き残るための対応を比較、分析することで、北海道の鍛冶屋の歴史的、技術的特性の解明を図り、また、現在も順調に営業を続ける鍛冶屋を選定し、それらが実践している戦略をもとに、今後の鍛冶屋の生存戦略を考察、提示する。

なお、本研究によって、得られた情報と成果は、「北海道の鍛冶屋 MAP」や「北海道鍛冶屋関連資料データベース」として整理、発信するとともに、これらを礎として、より多くの資料や情報の収集に努め、本研究のさらなる発展を図る。

### 3. 研究の方法

北海道の産業を支えてきた多様な道具類、鍬やブラウ、ハローといった農具、鉈やサツテ、トビといった林業用具、そして、アンカーやタモ、カギといった漁具、それらは、すべて鍛冶屋が造りだした製品であった。つまり、北海道の鍛冶屋は、開拓者として、農林漁業用具の生産者あるいは改良・開発者として、北海道の開拓、および農林水産業の発達において重要な役割を担ってきたのである。そして、各鍛冶屋のこれまでの経緯と経験には、各地域の開拓や発達の記憶が刻み込まれており、これまで記されることのなかった北海道開拓の歴史を知るための手がかりが内包されている。そこで、本研究は、北海道の各地域の鍛冶屋とその製品を利用する人びとを対象とした現地調査を実施し、地域産業とその役割の変化、その生産道具の変遷、および、地域産業における鍛冶屋の役割について明らかにし、地域産業とそれを支えてきた鍛冶屋との関係について検討する。

他方で、現在も営業を続ける鍛冶屋は、多くの鍛冶屋が姿を消していく中で、さまざまな工夫や努力によって減少の要因となった

変化を乗り越えきた鍛冶屋であり、現在の厳しい状況に対しても何らかの模索し、今後も営業を続けるための対応を模索し、そのための努力を重ねている。したがって、こうした現在の鍛冶屋の生存に着目し、北海道の各地域の鍛冶屋を対象とした現地調査から、鍛冶屋の減少をもたらした要因の解明を図るとともに、それらの要因に対してどのような対応をとってきたかを明らかにし、鍛冶屋の生存戦略を見いだす。そして、それをもとに、現在の鍛冶屋が実践している戦略を例示しながら、今後の鍛冶屋の生存戦略について考察、提示する。

本研究は、以上の考察・検討に基づき、研究期間内に、北海道の地域産業と鍛冶屋の間には、互いの仕事と暮らしを支え合うという相互依存関係が形成され、互いにその関係を重要視しており、こうした鍛冶屋と漁業者の協働によって、北海道における多くの開発と発展が成し遂げられてきたことを明らかにする。さらに、こうした相互依存関係は、鍛冶屋にとって最も重要なものであり、鍛冶屋が鍛冶屋として生き残る上で不可欠な要素であるが、北海道の鍛冶屋は、特にこれを重視しており、その伝統や形よりも、周辺地域の利用者の需要に応じ、自らの姿を変え、地域の産業やそれに携わる人びととの関係の維持を図る傾向があることを明らかにし、これを北海道の鍛冶屋の歴史的、技術的特性として提示する。

### 4. 研究成果

研究期間内に北海道内で実施した調査結果に基づき、北海道の鍛冶屋の現状について報告する。本調査では、道内の128(71.5%)市町村で調査を実施し、鍛冶屋および鍛冶経験者24軒、鍛冶屋関係者(妻、息子など)17軒、装蹄師および装蹄経験者11軒、装蹄関係者(妻など)2軒、鉄工所(旋盤、機械、

造船など)10軒、その他(農業従事者、漁業従事者、など)5軒の計69軒から情報を収集することができた。結果、道内に現存する鍛冶屋はわずか2市6町の8軒に過ぎなかった。なお、「鍛冶屋および鍛冶屋経験者」の年齢は60歳代が6名、70歳代が7名、80代以上が11名で、平均年齢は76.3歳であり、高齢化が進行していることは明白である。したがって、経験年数も50年以上の者が多い。

鍛冶屋経験者16軒のうち6軒は既に廃業、2軒は他の業種へ転業、残りの8軒は既に代替わりし、現業主は鍛冶屋およびその技術を受け継ぐことなく、他の業種へ転業してしまっている。また、鍛冶屋関係者12軒についても、そのうちの4軒は既に廃業し、残りの8軒は先代または先々代までは鍛冶屋であったものの、現業主は鍛冶屋およびその技術を受け継いでいない。現在の鍛冶屋業を営んでいる8軒についても同様であり、3軒には後継者はなく、後継者がある5軒も、父親が鍛冶屋を営み、息子が鉄工業に従事するという形の兼業形態をとっている。このように、北海道の鍛冶屋の兼業化、転業化の傾向は著しく、数年後には大多数の鍛冶屋が鉄工業へと転業する可能性が高い。

最も古い歴史を持つのは、明治3年(1870年)創業の当麻町の吉房鍛冶の5代目で、次が仙台藩の甲冑鍛冶を出自とする恵庭の明珍鍛冶で4代目である。この2軒、および高知の鍛冶屋の系統を受け継ぐ上士幌町と上富良野町の2軒の合計4軒の鍛冶屋を除けば、残り37軒の鍛冶屋および元鍛冶屋の出自は道外にはなく、いずれも創業者が道内の鍛冶屋で技術を修得し開業した「北海道生まれ」の鍛冶屋であった。つまり、道内の鍛冶屋従事者の多くは、道外から移住してきた農林水産業従事者の子どもたちであったのである。彼らが道内で操業する鍛冶屋に弟子入りし、技術を身につけ、道内各地で開業し、さらに新たな鍛冶屋を生み出していった。その結果

として道内に935軒の鍛冶屋が存在するという状況が生じたのであろう。

かつては鍛冶屋であった33軒のうち廃業した10軒を除く23軒は転業し、現在は異なる業種に携わっている。最も多いのは鉄工所(14軒:60.9%)であり、これは昭和40年代以降、日本が高度経済成長期に入り、次第に鍛冶屋の仕事が減っていく中で、後継者に溶接などの金属加工、機械、旋盤、車輛などの技術を学ばせ、事業の拡大や兼業化を図った結果であろう。このため、重機・農業機械・自動車などの車輛系(4軒:17.4%)への転業も比較的多い。また、農林業用具や刃物を地域に供給するという役割を引き継ぎ、金物屋や農林業機械の販売店になったところも2軒(8.7%)ある。そして残りの3軒は家庭用プロパンの販売業へ姿を変えていた。

鍛冶屋とプロパン販売では何の関係性もないように見える。しかし、調べていくと意外な関連性があることがわかってきた。現在のように電気溶接が主流となる以前は、酸素やアセチレンを用いたガス溶接が一般的で、地域からの需要が高まる中で多くの鍛冶屋がそれを取り入れていった。その後、道内の一般家庭において石炭からガスへのエネルギー転換がなされる中で、酸素やアセチレンを鍛冶屋に供給していた北海酸素(後のほくさん、大同ほくさん、現在のエア・ウォーター)が家庭用プロパンの販売を各地の鍛冶屋や鉄工所に委託するようになった。当時、委託販売に携わった方によれば、この仕事が非常に儲かったそうで、このことが転業の背景として考えられる。

鍛冶屋の生産物は多岐に渡っており、農具から、山林用具、生活用具、漁具などの生産があり、「鉄と名がつくものならなんでも作ってきた」と語る鍛冶屋が多い。まきストーブや石炭ストーブを生産していたという鍛冶屋、車の輪締めや馬糞、補導車の生産を行っていたという鍛冶屋もあった。また、遠別

町の江畑鍛冶は、鍛冶のみでなく、木工に従事し、プラウなどは刃の部分だけでなく木の部分もすべてを生産していたという。置戸や土別のような内陸の山間部では山林用具、利尻や厚岸のような沿岸部や島嶼の漁村では漁具の比重が高く、留萌のような鉱山の盛んであった土地では鉱業用具の生産もかつては見られ、地域の産業や生業との密接な関わりが見てとれる。特定の製品の生産に特化した例はほとんどなく、春夏は農機具、秋冬は山林用具を生産するという鍛冶屋も多い。秋田県の鍛冶屋（齋藤 2005）に多く見られたような「鍛冶場を離れて売り歩きに出かける」事例や「全国展開を図る」事例は、置戸の石井鍛冶が岩手や熊本、長野などの営林署に山林用具を収めていたという事例を除けばほとんど見られない。また、カスタムナイフを生産し、愛好家からの需要を集めている当麻町の吉房鍛冶のように活発な生産活動や営業を展開している鍛冶屋も非常に少なかった。

鍛冶場は、土間のところは少なく、コンクリートのところが一般的で、大きな鉄工所の一角に鍛冶場がわずかに残るといった事例が多かった。鍛冶道具は一般的に自作であり、各個人によってその形はさまざまであり、また、新たな技術や機器の導入に応じて多くの道具が考案され、多種多様な道具が鍛冶場に並んでいた。金床は、一般に、一方にとがった角を持つ大型の英式金床が使用されており、鋼材店等から購入しているところがほとんどである。鍛冶屋の従業者・後継者不足により、作業助手（「先手」、「向槌」）は姿を消し、すべての鍛冶屋でスプリングハンマーなどの機械ハンマーが導入されている。この導入により、単独での作業が可能になり、後継者不足等による人手不足が解消したほか、労力や体への負担の軽減につながったと同時に、新たな道具の考案や技術の改良といった必要性が生じた。

燃料については、「鍛冶粉」と呼ばれる目の細かい石炭を使用する鍛冶屋がほとんどで、木炭を使用している事例はもちろん、木炭を使用して鍛冶仕事を行っていたという話しもほとんどなかった。北海道の鍛冶屋に関しては、開業当初から石炭を使用しており、道外の鍛冶屋と異なり大きな燃料の転換が図られることはなかったようである。

以上のような北海道の鍛冶屋の現状をもとに、北海道の鍛冶屋の変化と現在に至る経緯について整理する。今回の調査で確認された限りにおいては、余接や金属加工などのいわゆる鉄工関係の仕事に関わることなく鍛冶仕事のみで現在も営業を続ける鍛冶屋は存在しなかった。このことから、北海道においては、変化、つまり社会状況の変化にかななる対応もとらなかつた鍛冶屋は生き残ることができなかつたことがわかる。

農林業の機械化が進み、建築業や土木業においても鉄骨などの金属資材が普及したことで、それまで農林業の道具やその他の鉄製品の製作、加工を担ってきた鍛冶屋のもとにさまざまな依頼が舞い込むようになった。溶接をはじめとする金属加工、トラクターや重機などの修理および調整、あるいはガス溶接や酸素溶接に関連しての家庭用プロパン販売の委託業務など、地域からの新たな需要に応えるために自らが新しい技術を学んだり、跡継ぎである息子にそれを学ばせたりといった対応が図られてきた。その後、それらの仕事が鍛冶仕事に取って代わっていく過程で、何らかの努力や偶然によって少ないながらも鍛冶仕事を続けてきたところのみが今日においてもなお鍛冶屋としての姿を残す結果になったものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

- 1) 齋藤貴之、「経済自由化以降の現代インド社会を生きる鉄鍛冶業の戦略と共生」、『北海道民族学』78(3)、399-411、2013。
- 2) 齋藤貴之、「道具と身体インターフェイスとしての機能する鍛冶屋」、『北海道民族学』10、56-66、2014。

〔学会発表〕(計 2件)

- 1) 齋藤貴之、「北海道の鍛冶屋の変化と生存利尻島の鍛冶屋とその生存を支えた磯漁との関係」、『京都人類学研究会(2011年6月、京都大学)』
- 2) 齋藤貴之、「北海道の人とものをつなぐ鍛冶屋」、『公開シンポジウム「北海道の伝統文化の変化と生存」(2014年8月、北海道大学)』

〔図書〕(計 1件)

- 1) 齋藤貴之、『生き残れ!日本の職人文化 日本の鍛冶屋をフィールドワーク』京都文教大学文化人類学ブックレット9、1-49、風響社、2013。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

- 1) 北海道の鍛冶屋  
(<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~r16749/blacksmith/index.html>)

6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
齋藤 貴之 (星城大学)

研究者番号：20455611

- (2) 研究分担者  
( )

研究者番号：

- (3) 連携研究者  
( )

研究者番号：